

高橋殿御返事

建治元年七月二六日 五四歳

瓜一籠、さげひげこ、えだまめ、ねいも、かうのうり給ひ候ひ了んぬ。

付法蔵経と申す経には、いさごのもちみを仏に供養しまいらせしわらは、百年と申せしに一閻浮提の四分が一の王となる。所謂阿育大王これなり。法華経の法師品には「而於一劫中」と申して、一劫が閻釈迦仏を種々に供養せる人の功德と、末代の法華経の行者を須臾も供養せる功德とくらべ候に「其の福復彼に過ぐ」と申して、法華経の行者を供養する功德はすぐれたり。これを妙楽大師釈して云はく「供養すること有らん者は福十号に過ぐ」と云云。されば仏を供養する功德よりもすぐれて候なれば、仏にならせ給はん事は疑ひなし。

其上女人の御身として尼とならせ給ひて候なり。いよいよ申すに及ばず候。但しさだめて念仏者にてやをはずらん。たうじの念仏者・持斎は国をほろぼし、他国の難をまねくものにて候。日本国の人々は、一人もなく日蓮がかたきとなり候ひぬ。梵王・帝釈・日月・四天のせめをかほりて、たうじのゆき・つしまのやうになり候はんずるに、いかゞせさせ給ふべき、いかゞせさせ給ふべき。なによりも入道殿の御所勞なげき入って候。しばらくいきさせ給ひて、法華経を謗する世の中御覧あれと候へ。日本国の人々は、大体はいけどりにせられ候はんずるなり。日蓮を二度までながし、法華経の五の巻をもてかうべを打ち候ひしは、こり候はんずらむ。

七月廿六日

日蓮花押

御返事